



KWANSEI
GAKUIN
UNIVERSITY



手話言語研究センター文化イベント

開催日時：2018年11月3日 10:00～15:00

開催場所：関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス 総合体育館

主 催：関西学院大学手話言語研究センター

目 次

総合司会 溝畑 潤 (関西学院大学人間福祉学部教授／デフラグビースポットコーチ)	
開会の辞	2
松岡 克尚 (関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員)	
第一部 講演「私が見たデフリンピック」	4
講師 古 隆喜 (兵庫県聴覚障害者協会理事／ デフリンピック・サムスン大会日本選手団広報担当)	
第二部 親善試合	21
デフバレーボール男子チーム VS 関西学院大学体育会バレーボール部男子チーム ミニ解説「デフバレーの世界へようこそ」	
講師 平 英司 (関西学院大学人間福祉学部非常勤講師／ 手話言語研究センター専門技術員)	
第三部 音のない世界でスポーツを体験してみよう	26
デフ卓球選手と関西学院大学卓球部によるエキシビジョンマッチとデフ卓球体験 協力：加藤 貴子 (兵庫ろうあ卓球部部長) 司会：川口 聖 (手話言語研究センター専門技術員)	
第四部 座談会	28
デフリンピックアスリート 安積 梨絵 石田 考正 信田 光宣 宮田 夏実 山田 真樹 関西学院大学体育会選手 岡本 壮太 岸上 空良 中川 礼生 林原 正汰	
閉会の辞	40
松岡 克尚	
登壇者紹介	42

開会の辞

松岡 克尚

○松岡 皆様、こんにちは。関西学院大学手話言語研究センターの松岡と申します。主催者を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。本来であれば、手話言語研究センター長の山本がご挨拶すべきところですが、本日は所用のため、私が代理でご挨拶させていただきます。

本日は、本センター主催「文化イベント」に、ご参加いただきありがとうございます。爽やかな秋空のもと、本学では新月祭（大学祭）が開催されております。多くの模擬店が学生達により設営され、皆様もこちらの会場に来る途中で、「あれも面白そうだな、これも美味しそうだな」と目移りして大変だったのではないかと思います。そうした中を、誘惑を絶ってこの会場まで一直線にお越しいただいた皆様の意志の強さに敬意を表したいと思います。

本センターは、日本財団のご支援で設置され、手話言語学の研究と、手話の普及・啓発を主な目的とした機関ですが、大学の中で設置されているというのは日本では珍しい存在になっています。先程申し上げましたように、本センターは手話言語の研究を進めていくことが大きな目的ですが、日本社会では手話や手話を使うろう者については、まだあまり知られていませんので、そういったことを広く一般に知ってもらうということも一つの目的としています。その一環として、手話やろう者の文化的な側面に焦点をあてたイベントを行っています。2016年度には手話と音楽をテーマとした映画の上映、そして、2017年度には手話落語を取り上げてまいりました。今年度は、「デフリンピック」をテーマとし、ろう者とスポーツとの関連に焦点をあてた内容となっております。

皆様、来年にはアラブのドバイでスペシャルオリンピックスという知的障害者の方のオリンピックが開催されることをご存知でしょうか。そして、2年後の2020年には、東京でオリンピック、パラリンピックが開催されます。同様にろう者、聴覚障害者のためのオリンピックであるデフリンピックは、昨年トルコのサムスンで開催されたところです。また、2025年にデフリンピックを日本で開催することを目標とした活動が行われていると聞いております。本日はデフリンピックをテーマに、様々な催しを企画いたしました。遠方から、デフリンピック日本代表選手や、メダリストの方々にもお越しいただいております。

まず初めに、トルコ・サムスン大会で、日本選手団の広報を担当されていた古隆喜様にご講演いただきます。その次に、デフバレー選手と本学バレー部の親善試合を行います。その後、「音のない世界でスポーツを体験してみよう」をテーマに、デフ卓球の体験を準備しています。そして最後に、デフオリンピック選手と本学体育会学生との座談会を企画しております。本日一日、このような充実した内容となっております。また、本日、司会をしていただきますのが、デフラグビー国際試合審判員のライセンスをお持ちで、実際に国際試合の審判のご経験もある溝畑潤先生です。溝畑先生は本学教員であります。このようにそうそうたるメンバーで、スポーツの秋ということもありますので、デフスポーツについて大いに楽しんでいただき、新月祭も楽しんでいただければと思います。

皆様にとって有益な一日になりますことを祈って私の挨拶とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【第一部】講演「私が見たデフリンピック」

講師：古 隆喜

○溝畑 皆様、おはようございます。本日は、講演者の方、また、たくさんのデフリンピック出場選手の方をお招きし、関西学院大学手話言語研究センター主催文化イベント「デフリンピックを知ろう」を開催いたします。本日、司会をおおせつかりました関西学院大学人間福祉学部の溝畑潤と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、講演に先立ちまして、講師をお務めいただきます古隆喜様をご紹介します。古さんは、昨年のデフリンピック・トルコ・サムスン大会において日本代表選手団の広報を担当されました。また、ご自身もデフリンピック男子サッカー日本代表としてご活躍された経験をお持ちでいらっしゃいます。現在は兵庫県聴覚障害者協会の理事もお務めになられております。さらに本学とのゆかりでは、奥様が関西学院大学の卒業生でございます。それでは、本日は「私が見たデフリンピック」と題してご講演をお願いしたいと思います。皆様、拍手でお迎えください。

○古 皆様、おはようございます。ただいまご紹介いただきました古と申します。本日は、デフリンピックについてお時間を頂戴しお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。デフリンピックは、決して知名度が高いとは言えませんので、是非、本日のこの講演を機に広めていただけたら私も幸いに存じます。先程、司会の方からご紹介がありましたように、私も選手としてデフリンピックに参加した経験がありますので、私自身の経験も含めて講演をさせていただく予定です。

まず、手話の確認ですが、以前は、デフという手話表現を付けて「デフリンピック」と表現していましたが(写真①)、世界ではこのような表現(写真②)が主流となります。

デフリンピックについては、皆様、ご存知でしょうか。デフリンピックは、オリンピック、パラリンピックと同じように、また、先程のお話にありましたスペシャルオリンピックと同じように、4年に一度開催されている国際的なスポーツの大会です。デフリンピックには組織委員会もあり、様々なルールや競技を決めて開催されます。IOCというオリンピック組織委員会の下にICSD(国際ろう者スポーツ委員会)という組織があります。ICSDの役員は全てろう者で聴者はいません。つまり、ろう者が主体

的に運営をしています。本部はアメリカのフロリダにあります。

デフリンピックという名前は聞いたことがある方は多いと思いますが、本日は、デフリンピックの歴史についても、是非、皆様に勉強していただけたらと思います。

デフリンピックは、夏季大会と冬季大会とがあります。去年は、トルコのサムスンで夏季大会が開催されました。今回は、2019年にイタリアで冬季大会が開催される予定です。

デフリンピックは1924年、フランスのパリで第1回夏季大会が開催され、以来4年ごとに開催され続けています。各大会のロゴマークをスライドに表示しております(図③)が、これ以前の大会のロゴもインターネットで見ることができます。

I O Cがデフリンピックという名称を認めたのはローマ大会からです。それまでは、「世界ろう者競技大会」という名称でしたが、I O Cの傘下として、聴覚障害者のスポーツの大会であることが位置づけられ、デフリンピックという名称も認可されました。

私もデフサッカー男子チームで日本代表となり、デフリンピック・メルボルン大会(オーストラリア)に出場しました。また、その4年後のデフリンピック・台北大会(台湾)にも日本代表として出場しました。その後は、選手は引退しまして、応援団としてブルガリアのソフィア大会に観戦に行きました。そして、一番最近開催されたのが、去年のトルコ・サムスン大会です。サムスンの手話表現は、タバコの栽培が有名な場所なので、タバコを吸うような表現です。

夏季大会が開かれた1924年から25年後の1949年に、オーストリアで第1回デフリンピック冬季大会が開催されました。スライドは各冬季大会のロゴマークです(図④)。今回、2019年冬季大会について非常に大きな問題が起きましたが、皆様、ご存知でしょうか。開催予定地のスロバキアで資金の横領問題が発生し、スロバキアでの開催ができなくなり、イタリアでの開催に変更となりました。皆様も機会があれば応援に行ってください。

写真① デフ + オリンピック



写真② デフリンピック



図③ デフリンピック夏季大会のロゴ



図④ デフリンピック冬季大会のロゴ



〈デフリンピックにおける視覚的なルール〉

2年後には東京でオリンピック、パラリンピックが開催されますが、聴覚障害者が身体障害者スポーツの祭典であるパラリンピックに入っていないのはご存知でしょうか。例えば、ろう者は音で判断できないので、スタートの際はライトなど視覚的に見えるものを使います。デフリンピックではライトなど視覚的なものを使うことをルールとして位置づけています。その辺りが、パラリンピックとは異なるところです。

これは水泳競技の際に使われるライトです(写真⑤)。例えば、背泳ぎの場合は上方を見てスタートしますので、バーを持った際にライトで合図がわかるようになっています。飛び込み台から飛び込む場合には、各飛び込み台の下にライトが付いています(写真⑥)。

他に、800mや400mなどのように何度かターンをする種目の場合は、最後のターンの時に、このように水しぶきを立てて合図をしています(写真⑦写真⑧)。また、旗を使う場合もあります。ブザーなどは聞こえませんが、このように視覚的なもの、または、水の振動などを使って選手に知らせるというのもデフリンピックの特徴です。

トラック競技ですと、長距離走などでは、全員が一斉にライトの点滅を見てスタートをします(写真⑨)。100mや200mなどの短距離走の場合は、スタートの際にこのようなライトを使います(写真⑩)。先程見ていただきましたライトが、各コースに付いているということです。

サッカー(写真⑪)やバスケットボールなどのフィールド競技では旗を使います。特に広いコートで行うスポーツの場合は、当然、先程の水泳と同じように笛は聞こえませんが、旗を使って選手に情報が行き渡るようにします。この旗を使う人も1人ではなく、フィールドの各場所に配置されます。サッカーの場合ですと主審とラインズマン(副審)、更にそれぞれのゴールの後ろに1人ずつ立ち、計5人の審判が旗を持っています。1人の審判が反則を見つけ、笛を鳴らすとともに旗を揚げると、それを見た他の審判4人も一斉に旗を揚げます。

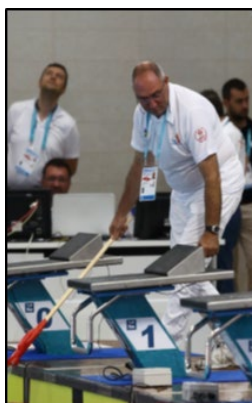
写真⑤ 水泳(背泳ぎ用)のライト



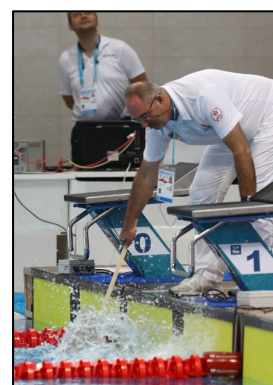
写真⑥ 水泳の飛び込み台のライト



写真⑦ 水泳の最終ターン



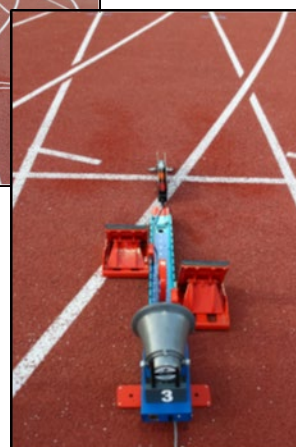
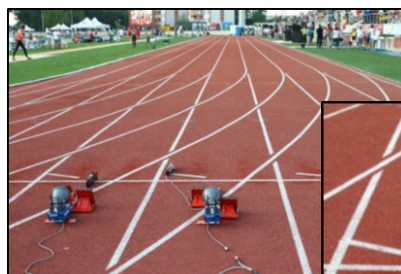
写真⑧ 水泳の最終ターン



写真⑨ 陸上競技用のライト(中・長距離)



写真⑩ 陸上競技のライト(短距離)



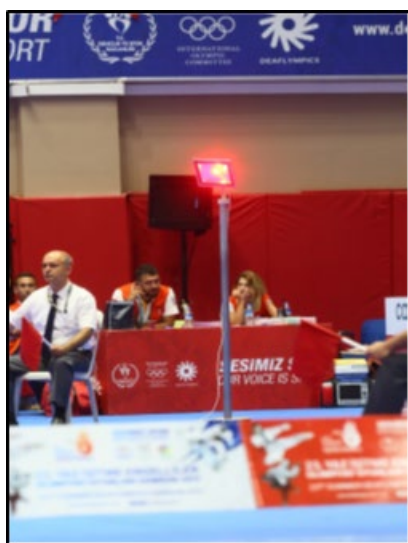
写真⑪ サッカーの審判



これは、空手で使われるライトです（写真⑫）。柔道やレスリングなどの競技では試合場内を動き回りますので、四方にライトが付いています。組み合いながらどの方向を見ていても、瞬時に判定がライトで視覚的にわかるようになっています。

続きまして、自転車競技会場の写真(写真⑬)ですが、実は、東京オリンピック開催が決定される前にトルコと開催地を競っていたことをご存知でしょうか。結果的に、東京が開催地になりました。この写真にある物は、トルコがオリンピックの招致活動をした際に、PRのために作った表示板です。「せっかくなので、デフリンピックがトルコであるからそのまま置いておこう」ということになりずっと残されていたのです。この表示板は、例えば、自転車競技などで、コーチがコースの脇に立つ際には自分のチームのコーチがどこに立っているかの目印にもなります。このように様々な視覚的な工夫がデフリンピックではされています。それ以外にも色々な面白い工夫がありますので、是非、皆様調べてみてください。

写真⑫ 空手会場のライト



写真⑬ 自転車競技場



〈デフリンピックの参加資格〉

次に参加条件についてですが、補聴器、人工内耳などは外して競技に参加します。何も装着していない状態で、聴力が 55 デシベルを超えていなければ参加することはできません。また、日本のルールとしては聞こえないということに加え、全日本ろうあ連盟の会員でなければ参加することができません。韓国の場合は 55 デシベル以上という条件のみで参加できるそうです。アジアの中でも国によって参加条件が異なってきます。

〈豆知識①デフリンピックの歴史はパラリンピックの歴史より長い〉

デフリンピックについての豆知識を皆様にお話ししたいと思います。パラリンピックとデフリンピックの歴史を比べると、デフリンピックのほうが長いのです。先程、ご説明したとおり、デフリンピックは 1927 年に第 1 回目が開催されました。そして、第二次世界大戦以降にパラリンピックが開催されました。パラリンピックの開催のきっかけは、戦争による負傷によって身体に障害を負った方々が、大勢病院でリハビリされていたことから、「障害者のオリンピックを開いたらいいのではないか」ということになり開催に至ったそうです。

〈豆知識②デフスポーツ選手はオリンピックの選手にもなれる〉

オリンピックには、耳の聞こえない選手も出場することができます。ただ、スタートの音が聞こえないというハンディキャップは生じます。パラリンピックには参加できません。パラリンピックに出場すると身体能力が違いすぎて、平等に競技ができないのではないかとされています。つまり、もしパラリンピックにろう者、聴覚障害者の人が出場すると、簡単に金メダルを獲ってしまうのではないかとということです。昔はデフリンピックとパラリンピックを合併しようとした動きもあったようです。しかし、運営についての会議を開いた際に、ろう者は手話通訳者を同行するわけですが、会議中、英語や様々な言語が飛び交い、リレー通訳がなされる中で手話通訳を用いると、どうしてもタイムラグが生じます。その結果、聞こえる人たちとろう者とで平等には会議が進まなかったのです。そのような背景から、パラリンピックに加わずに、その後も両者は別々に運営していくことになりました。

〈豆知識③手話は世界共通ではない〉

手話は世界共通だと思いますか。違いますよね。日本には日本手話があり、韓国には韓国手話、アメリカにはアメリカ手話というように各国で手話があります。では、デフリンピックでは、選手たちはどのようにコミュニケーションをしますか。身振

りでしょうか。それもあると思います。他には国際手話を使います。皆様、国際手話をご存知でしょうか。世界に目を向けると、各国で国際手話を用いる人が増えてきましたが、日本では国際手話の知名度がまだまだ低く、話せる人は少ないですね。

〈豆知識④デフリンピックの知名度は…〉

デフリンピックの知名度は何%だと思いますか。昔は2.8%という報告がありました。サムスン大会の開催前では11.2%だったそうです。現在何%なのかは国が調査中ですが、私個人の感覚では、知名度は20%ぐらいまで上がったのではないかと感じています。それでも、日本ではまだまだデフリンピックの知名度は低いと思います。アメリカでは60%以上はあるのではないのでしょうか。日本では、ろう者の中ではご存知の方が多いですが、聞こえる方たちの中では知名度はまだまだ低いですね。

〈トルコ・サムスンデフリンピック 2017 について〉

次にサムスン大会に広報として行った時の報告をします。成田から出発しまして、10時間かけてイスタンブールに到着しました。そこから、サムスンに行きました。首都アンカラから乗り継いでサムスンへ行くというルートもあるそうです。

出発した時の様子をご覧ください(写真⑭、写真⑮)。空港のカウンターにもデフリンピックの選手団専用のブースが作られていました。盛大に見送りをしてもらいました。

カメラ撮影や新聞記者の取材で、メディア団体とのやりとりもしました。朝日新聞や毎日新聞、そしてメディアの方も大勢いらっしやっていました。このようなことは過去の大会ではありませんでした。バスにもデフリンピックというロゴがついていました。

サムスン市内の様子です(写真⑯)。デフリンピックの周知のためにこのように、各競技のモニュメントも作られていました(写真⑰)。

こちらは選手村の様子です(写真⑱)。本来ここは大学でして夏休みの休校中に使わせてもらっています。凄く急な坂道の上に大学があります。これはアクレセンターの様子です(写真⑲)。ここで選手登録のためのICカードを作ります。

こちらはメディアセンターです(写真⑳)。ここには各国のメディア担当者がおり、私も広報を担当していましたのでここに常駐していました。撮影には非常に細かなルールがあり、それに基づき様々な取材、広報活動を行いました。情報通信機器も非常に発達していて、様々なパソコン機器も使えました。これは日本の選手団の本部の様子の写真です(写真㉑)。選手村の8階フロアにあり、例えば、選手が怪我をしたという情報から競技の結果に至るまで、様々な情報がここに集約されるわけです。

写真⑭ 出発の様子



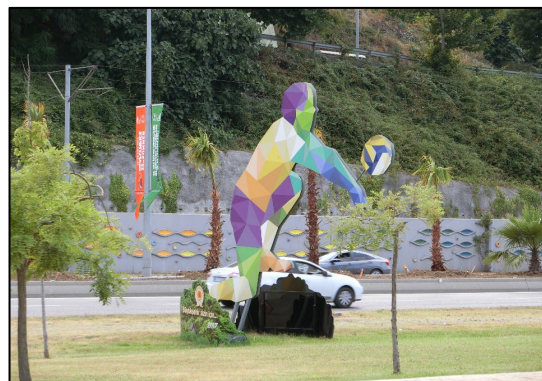
写真⑮ 出発の様子



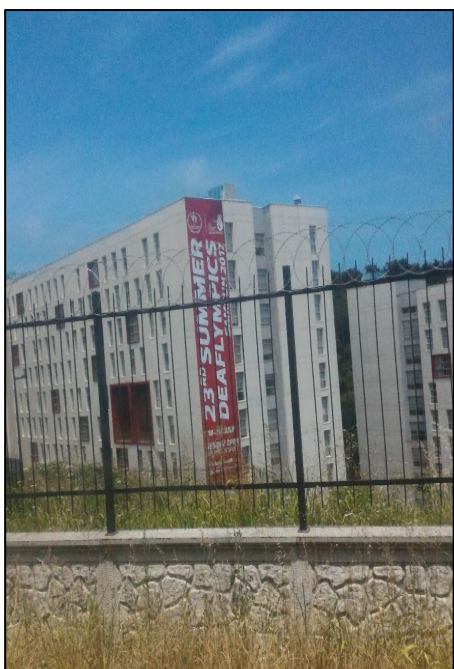
写真⑯ 市内の様子



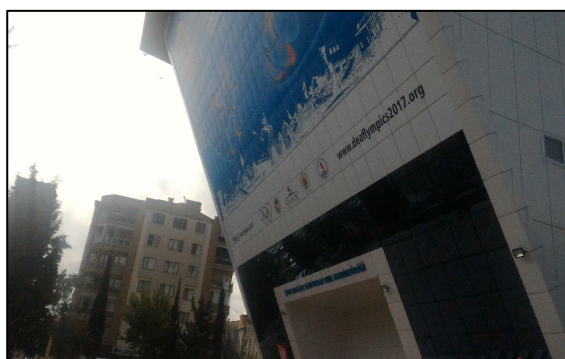
写真⑰ 市内に作られたモニュメント



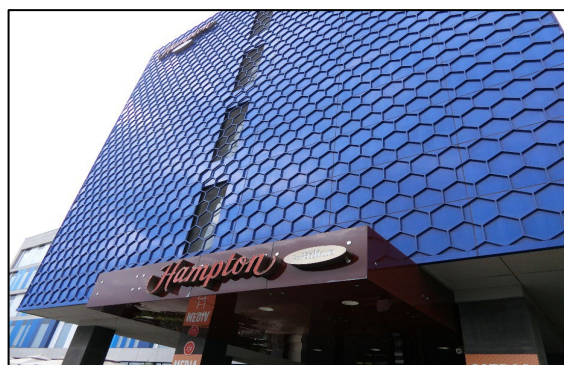
写真⑱ 選手村外観



写真⑲ アクレセンター



写真⑳ メディアセンター



写真㉑ 日本選手団本部



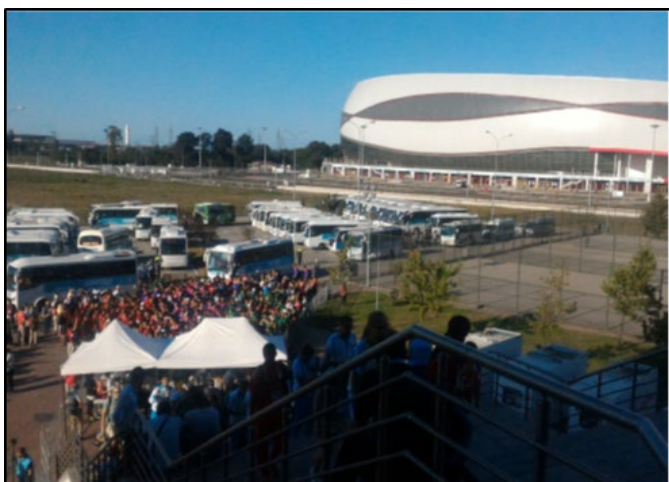
〈デフリンピック・サムスン大会の様子〉

次に大会の様子をご紹介します。これはデフリンピックのために作られた競技場です(写真⑳)。一周するのに30分ぐらいかかるとても大きな競技場が建設されました。大会の開会式や閉会式もこちらで行われました。

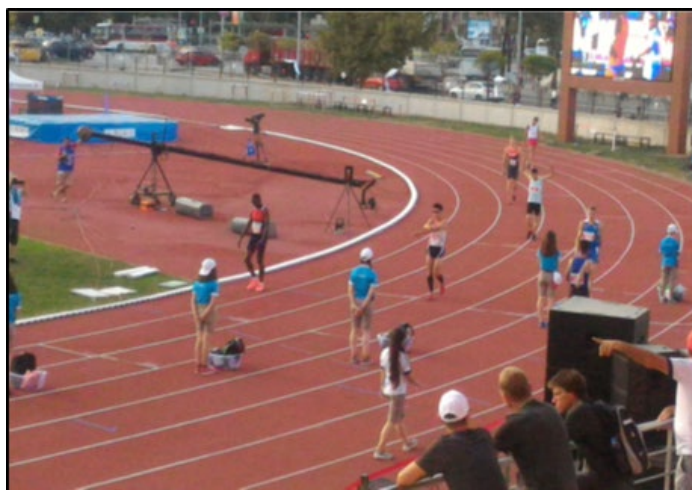
これは、陸上競技の様子(写真㉑)と水泳会場の写真です(写真㉒)。バドミントン会場(写真㉓)は観客が少ないですが、会場が非常に離れたところにあり、公共の交通機関がなかったのが理由です。バレーボールの会場です(写真㉔)。こちらは卓球の会場の写真です(写真㉕)。

私が驚いたのは、競技の結果がホテルのテレビでも速報で流れていたことです。

写真㉑ 開会式会場



写真㉒ 陸上競技会場





写真㉔ 水泳会場

写真㉕ バドミントン会場



写真㉖ バレーボール会場

写真㉗ 卓球会場

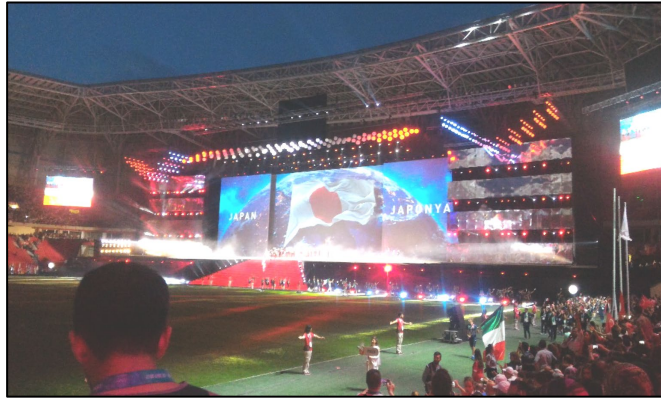


これは開会式(写真㉘～㉚)と閉会式(写真㉛)の写真ですが、とても盛大に開催されました。国際手話通訳者の映像がこのように大画面で流されています(写真㉚)。左側が国際手話の通訳者、右側がトルコ手話の通訳者です。会場の大型スクリーンで流されます。もちろん国によって手話は違うので、私もトルコ手話を興味深く見ていました。行政関係の方々も、大勢参列しておられました。ドローンでの撮影も行われていました。

サムスン大会には、全 86 カ国、2,859 人の選手が参加しました。スタッフも入れると、4千人、5千人規模だったのではないかと思います。サムスン大会の種目は 21 競技ありまして、その内、日本の選手が参加したのは 11 競技です。結果、金メダル 6 個、銀メダル 9 個、銅メダル 12 個という素晴らしい成績を収めました。メダルを獲得した主な選手をご紹介しますので、是非覚えていただければと思います。

まず、陸上短距離の山田選手です。非常にたくさんのメダルを獲りました。続きまして、水泳の藤原選手です。藤原選手も多くのメダル獲りました。湯上選手は円盤投げの選手です。彼はデフリンピックだけではなく、東京オリンピックの代表選手候補にも選ばれているくらいの優秀な選手です。皆様、非常に優秀な選手ですので、是非、応援してください。

写真⑳ 開会式の様子



写真㉑ 開会式の様子



写真㉒ 開会式の様子



写真㉓ 手話通訳が映し出されたスクリーン



写真㉔ 閉会式の様子



今回、広報担当でサムスンに行きましたが、選手時代から思っていた様々な課題を少し皆様にお話ししたいと思います。先程、メダルを獲得した選手をご紹介しましたが、デフリンピックの選手を見て「あの選手だ！」というのではないですよ。実際、私自身も話の中で、「ああ、あの時メダル獲った選手だ」と後になって気付くこともあるくらいで、もっと選手が有名になればいいなと思います。小さい子供たちにデフリンピック選手をもっと知ってもらえると、手話やろう者、難聴者についても、幼少の頃から関心を持つようになると思います。

次にデフリンピックは自己負担が非常にかかります。例えば、合宿などの宿泊費や練習する会場代を、選手が自己負担をしている競技が大半です。行政から一部補助が出る場合もありますが、それでも苦しい状況です。手話通訳に関しても、各スポーツの専門知識が必要です。しかし実際、例えば陸上の専門知識を持った手話通訳者など、個々の競技に造詣が深い手話通訳者を確保するのは大変です。また、デフリンピックで優秀な成績を残したとしても、例えば、合宿を行う場合も、聞こえる選手のように招待選手として扱われるのではなく、一般の選手と同じように自分で予約を入れますし、国からの補助もありません。

続いて、先程も述べましたが、国際手話ができる日本人が少ないということです。例えば、選手時代に、オーストラリアのメルボルン大会や台北大会に出場しましたが、それぞれの国の選手たちが活発に手話で話をしていました。しかし、日本の選手はデフリンピックに参加しても、なかなか他の国の選手と関わろうとしない感じがします。そのことが、全て悪いわけというわけではないですが、国際手話が使えぬ日本のろう者が少ないことも関係していると思います。仮に、2025年日本でデフリンピックが開催となった場合、もっと国際手話を使える人を増やして、おもてなしができるようにしておかないといけないと思います。

そして、日本ではデフリンピックの知名度が低いので、今後20%、30%と知名度を上げていき、耳の聞こえない人だけではなく、耳の聞こえる人にも、もっとデフリンピックについて知ってもらう必要があると思います。

様々な情報が簡単に入手できる時代なので、デフリンピックが開催された時だけ注目されるのではなく、継続的にデフリンピックが注目され続けることを願います。

最後になりますが、現在、デフリンピックの夏季大会は21競技、冬季大会は7競技あります。今回のサムスン大会からゴルフが新しい競技として加わりました。来年の冬

季イタリア大会からは、何が加わると思いますか。チェスです。チェスが新しくデフリンピックの競技として加わります。残念ながら、日本には出場予定の選手がいないので、今なら皆様、日本代表になれるチャンスですよ。

では、これで私の話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

○溝畑 古さん、どうもありがとうございました。

少し時間がございますので、質問がありましたら挙手をお願いします。

○質問者 講演ありがとうございました。デフリンピックの選手を選出する際の基準について教えていただけますか。

○古 ご質問ありがとうございます。例えば、サッカーの場合で言いますと、全国ろうあ者体育大会という、毎年日本国内で行われている大会があります。そこで、日本代表の監督が優秀な選手を探し、その選手には、後日、日本代表選手の候補通知が届くようになっています。他には、選手代表を選ぶための選考会を開いている競技もあり、選出方法は競技団体ごとに異なります。ですので、全日本ろうあ連盟の体育委員会が基準を設け、代表選手を決めるわけではなく、各競技団体に基準が委ねられているということになります。

○溝畑 素晴らしい質問ありがとうございました。会場の後方に、代表選手のユニフォームを飾っていますので(写真③④)、この後、ご覧いただければと思います。古さんもまだまだ現役で活躍できそうな体ですが、現在は広報担当ということですね。我々も大変勉強になりましたので、是非、デフリンピックを広めていきたいと思います。本日はありがとうございました。

写真⑳ 講演会の様子



写真㉑ デフリンピックのユニフォーム



【第二部】親善試合

デフバレーボール男子チーム VS 関西学院大学体育会バレーボール部男子チーム

ミニ解説「デフバレーの世界へようこそ」

講師 平 英司

○溝畑 続きます、北フロアで、体育会バレーボール部男子チームと、デフバレーボールチームとの親善試合がございます。それに先立ちまして、手話言語研究センターの平さんから、デフバレーボールの解説をしていただきます。平さん自身もデフバレーボール男子日本代表チームの手話通訳をなさっていました。よろしくお願いします。

○平 おはようございます。関西学院大学手話言語研究センターで専門技術員をしております平と申します。サムスン大会では、男子バレーボールチームの手話通訳者として同行させていただきました。デフバレーボールの試合を生で見たことある人いますか。私は手話通訳をするまでバレーボールの試合を生で見たことありませんでした。

写真㊸ ミニ解説の様子



デフバレーの「デフ」は耳が聞こえないという意味です。ルールは聞こえる人と同じです。6人制で1セット25点です。3セット取ったほうが勝ちです。聞こえるチームと違うのは、聞こえない状況で競技をするということです。先程、古さんからもお話がありました、補聴器を外し、聴力が55デシベル以上の人が参加できるようになっています。耳が聞こえない、聞こえにくい状態で競技をしますので、アイコンタクトがとても大事になります。ボールが空中に飛んでいる間も、アイコンタクトで仲間に伝えたりします。

あと、周辺視野もとても大事です。これ(写真③⑥)は何をしているかといいますと、日本人は背が低いのでスパイクをしてもブロックされることを想定し、ブロックされたボールを拾う練習をしています。聞こえる選手の場合は、味方選手のスパイクを打った音を聞き、相手のブロックに構えるわけですが、ろうの選手には打った音がわからないので、相手のブロッカーの手の辺りを見ながら、味方のスパイカーの打った様子も見る必要があります、そういう広い視野を持たなければ勝っていけないということになります。

写真③⑥ ブロックのフォローの練習



写真③⑦ 手話での指示の様子



世界大会の場合、手話は世界共通ではないので、自国の手話をしていても作戦が相手選手に伝わってしまうことはありませんが、それでもある程度ばれてしまうことがあります。なので、ろう者のチームと試合をする際は、普段手話は両手でしますが、相手に見えないように顔の辺りで片方の手だけで手話をします(写真③⑦)。

先程の講演で、陸上ではスタート時にライトを使用するという話がありましたが、バレーボールではラリー中にライトを消したり、フラッシュをたいたりすると危険ですよね。例えば、相手のチームが違反をした時、聞こえる人たちの試合だと、審判が笛を吹きますが、ろう者の試合の場合はどうするかといいますと、たいていの場合、周囲の反応で気付くのですが、気付かずラリーが続く時は、審判がネットをゆらし、試合を中断します(写真③⑧)。選手はネットのほうを確実に見ているので、このようなことができるわけです。聞こえる人の試合では、サーブを打つ時などは審

写真③⑧ 中断の合図



判がジェスチャーをつけながら笛を吹きます。野球でもアウト、セーフのジェスチャーを使いますが、これは大リーガーの聞こえない選手が提案したものです。同じように、バレーボールの時も、様々な審判のジェスチャーがありますので、聞こえる人たちとも試合ができるわけです。

写真㉙ 試合の様子

この写真(写真㉙)はサムスン大会での試合の様子です。去年のデフリンピック男子バレーボールの結果ですが、トルコが金メダル、2位がウクライナ、3位がロシアでした。ロシアは、オリンピックやパラリンピックでは出場を許されていないのですが、デフリンピックでは出場が許可されています。日本は7位でした。



一方、女子バレーボールは金メダルを獲りました。これは凄いことです。女子は毎回、メダルを獲っています。

トルコ大会では、日本選手団にたくさんのトルコ人ファンがきました。トルコには親日家の人が多く、応援してくれている人もほとんどトルコ人です。

ここで、本日の親善試合に出場してくださる選手の方々をご紹介します。まず、背番号1番の狩野選手です。彼はサムスン大会でキャプテンを務めました。キャプテンはユニフォームの番号下に一本線が入っています。デフバレーボールでは、「キャプテン」という手話は胸の下に一本線で表します。彼の職業は医師です。補聴器をつけると、ある程度は聞こえるので、補聴器をつけながら医師をしています。聴覚障害者が医師免許を取ることが許されるようになったのは日本では最近のことなので、日本では珍しい難聴の医師です。医師をしながら、日本代表のバレー選手もしています。次は、背番号10番の加賀辰樹選手です。リベロという役割の選手です。リベロは、ボールをとって守るだけの選手で、点数を取ってはいけません。試合中は、一人だけ仲間と違う色のユニフォームを着ます。3年前のろう者のバレーボール世界選手権大会では、世界各国の選手たちの中で優秀選手の一人に選ばれました。野球でいうベストナインのようなものです。続いては、背番号8番の加賀充選手です。名前でご気付いた方もおられると思いますが、10番の選手と兄弟です。彼は、セッターというポジションです。背番号2番

は信田光宣選手。信田選手は、6回も日本代表に選ばれています。実に24年間ずっと日本代表で居続けている選手で、レジェンドと呼ばれています。昨年のデフリンピックに出場した日本代表バレーボールの男子チームには、15歳の選手もいて、チーム内で凄く年齢差がありました。日本選手団の最年少と最年長が男子バレーチームにいたわけです。背番号5番の愛知県から来てくれた高橋選手や背番号3番の栃木から来てくれた若原選手、彼らもデフリンピックを何度も経験しています。前回のデフリンピックには出ていませんが、背番号9番の遠山選手と背番号3番の村田選手は、次回のデフリンピックを目指す有望な選手達です。

さて、本日は、試合前に始球式を行います。始球式をしてくださる方をご紹介します。一人目は、水野文寧さんです。西宮市でバレーボールをしている小学生で、夏休みの自由研究のテーマにデフリンピックを選びました。選手にインタビューもして調べた自由研究が市内で優秀作品に選ばれました。二人目は、サムスン大会で金メダルを獲得した女子バレーボールチームの安積選手です。そして、開会の挨拶をさせていただいた本センター研究員の松岡と専門技術員の下谷です。

それでは皆様、バレーボール親善試合をお楽しみください。そして、デフバレーってこういうものかと感じていただけたらと思います。

親善試合の様子

デフバレーボール男子チーム VS. 関西学院大学体育会バレーボール男子チーム

写真⑩ 始球式の様子



写真⑪ 試合の様子



写真⑫ 試合の様子



写真⑬ 試合の様子



写真⑭ 試合終了後の集合写真



【第三部】音のない世界でスポーツを体験してみよう

デフ卓球選手と関西学院大学体育会卓球部によるエキシビジョンマッチとデフ卓球体験

協力：加藤 貴子（兵庫ろうあ卓球部部長）

司会：川口 聖

ろう者の卓球選手である加藤貴子氏をお招きし、関西学院大学の卓球部選手たちとシングル・ダブルスの試合をしていただきました。関西学院大学体育会卓球部の選手たちには、イヤホンから音を流し卓球の音が聞こえない状態で試合をしてもらいました。その後、参加者の方々にも、同じようにイヤホンをつけていただき卓球体験をしていただきました。

写真④

関学卓球部林原氏対加藤氏の
シングルの試合（奥が加藤氏）



写真④ ダブルスの試合

写真④ 参加者によるデフ卓球体験の様子



【第四部】 座談会

〈登壇者紹介〉(写真左から)

関西学院大学体育会選手

中川 礼生

(バレーボール部男子)

岡本 壮太

(陸上競技部)

岸上 空良

(水泳競技部マネージャー)

林原 正汰

(卓球部)

写真④ 座談会の様子



司会

溝畑 潤

デフリピアン(デフリンピック参加経験のあるデフアスリート)

信田 光宣

(バレーボール男子:2017年サムスン大会で6度目のデフリンピック出場を果たす)

山田 真樹

(短距離走:サムスン大会では4×100mの金をはじめ3個のメダルを獲得)

石田 考正

(ハンマー投げ:2013年ソフィア大会では4位、サムスン大会では銅メダルを獲得)

安積 梨絵

(バレーボール女子:サムスン大会の金メダル他、今まで計4個のメダルを獲得)

宮田 夏実

(サッカー女子:ソフィア大会に出場。2018年アジア大会得点王。関西学院大学在学)

○溝畑 皆様、こんにちは。

只今から座談会ということで、デフリンピック選手の皆様と本学の在學生に意見を持ち寄っていただき、それぞれが感じることや苦勞していることなども含めてお話しいただきます。フロアの皆様からのご質問もお受けしたいと考えておりますので、よろしくお願ひします。

それでは、自己紹介をさせていただきます。本日、総合司会をしております溝畑です。私とデフスポーツとの関係は、父親が第1回デフラグビーワールドカップの団長をしていて、その関係からデフラグビーのコーチやレフリーをした経験があります。日本代表対オーストラリア代表の国際試合の審判をしたこともあります。また、留学先のイギリスでもウェールズのチームのコーチをしていた経験があります。よろしくお願ひします。

では、まず本日、実際にデフ選手とバレーボール及び卓球を一緒にされた立場から本学の学生アスリートである中川さん、林原さんに感想を伺いたいと思います。

○中川 本日試合させていただいて一番思ったことは、僕たちのような健常者と同じ感じで、バレーボールが上手だなと思いました。あと、バレーボールはコミュニケーションが大切なのですが、そこで何一つ苦勞することなくコミュニケーションとっておられたので、そこはどうされているのかと疑問に思いました。

○林原 イヤホンをつけながら音楽を聴き、卓球の音が聞こえない状態で試合をしました。普段は音で回転やリズムや速さを感じるのですが、今日はそれが聞こえなかったのが難しく感じました。

○溝畑 お二人のコメントには二つ疑問点があったと思います。一つ目は、チームでのコミュニケーション方法、二つ目は、音のない世界での試合に対するモチベーションについてです。最初の疑問点については、バレーボールがご専門の信田さん、安積さんにお聞きしたいと思います。

○信田 日本代表の場合は、だいたい月に一度集まって練習をします。全国に選手が散らばっていますので、月に一度しか集まれません。ですので、やはりコミュニケーションが大切ですね。音のない世界にいるので、目で見えて情報を得ていますし、当然、手話を使います。しかし、チームの中で手話ができないメンバーもいます。お互い通訳を使ったり、口話でもいいから思ったことを言ってもらって読話をしたり、気持ちをつかみあってコミュニケーションをしています。一番大切なのは目と目をきちんと合わせることです。練習中に何かあれば一旦ストップをして、お互いに確認をしながら、練習を重ね

チームを作っていました。時間をかけながら、サムスン大会まで練習を積み重ねて、一つ一つ課題を解決してきました。

○溝畑 ありがとうございます。

○安積 信田さんと重なるところも多いですが、最近
は聞こえるチームに所属しているろうの選手も増えて
きました。ろう学校で育った選手は手話を自然に
身につけていますが、普段聞こえる人のチームに入
っており、手話に触れることがない選手は、手話を
覚えるのが大変だと思います。

写真④ 安積 梨絵 氏



です。合宿で皆が集まるとコミュニケーションをとるのが大変なこともあります。そういう選手にも、デフバレーの日本代表チームにいる以上は「手話を覚えてください」とお願いし、簡単なものだけでも覚えてもらっています。試合の時にも監督からの指示が簡単な手話で伝わるように頑張っています。3年間の強化練習の中で、途中からチームに加わり数か月に一度の合宿に参加する選手などは、特に手話を覚えるのが大変だと思いますので、最低限の簡単なことだけ伝えられればいいと考えています。結局、世界と戦う中で、そこまで大変なこともなく、だんだんとスムーズなコミュニケーションがとれるようになっていきました。

○溝畑 ありがとうございます。では宮田さんお願いします。

○宮田 私は関西学院大学では聞こえる人たちのチームに入っています。ですので、お互いに声を出し合いながらプレーしています。ただ、私は全く聞こえないので皆よりもずっと周りに気をつけて見えています。自分が声を出せば周りの人は聞いてくれます。しかし、デフサッカーのチームでは皆が聞こえないので、私が声を出しても他の人は聞いてはくれません。ですので、とにかくアイコンタクトをとって頑張っています。周りを見て、身振りも手話も全部使ってコミュニケーションをとっています。

○溝畑 ありがとうございます。安積さんのお話にあったように、私の経験でも手話のできない選手がデフラグビーの中にもいまして、コミュニケーションをとるのが難しいというのはわかります。時間はかかりましたが、合宿を繰り返すことでチームがまとまってきたと感じました。やはり時間ってかかりますでしょうか。

○信田 やはり手話ができない人には手話を教えることもそうですし、ホワイトボードを活用したり、軽度の難聴で手話のできる選手が通訳を担うなど、色々な工夫をしながら

なんとかチームをまとめていくので、なかなか大変な部分もあります。

○溝畑 次に山田さんと石田さんにご質問ですが聞こえないことに対するメリット、デメリットを教えてくださいませんか。

写真⑩ 山田 真樹 氏



○山田 聞こえないことによるデメリットとして、スタートが遅れることがあります。ただあくまで私個人の考えですが、「スタートは少々遅れてもいい、最終的に速ければよい」と割り切っています。例えば、関西学院大学には多田選手がいますが多田選手はスタートを重視しています。僕がスタートで勝負しても勝ち目はありません。その後が勝負になります。

一方、デフリンピックでは視覚的なものがあるのでライトを使ってスタートをきることができます。スタートの時にライトがあつて、ラインに立つ人はみんな平等にスタートできます。聞こえないことのメリットは集中することができるということです。音を遮断する状況に日常からいますので、逆にメリットになるかと思います。

○石田 ろう者の集まった試合では、同じ条件の人が集まっているので、競技面で問題はないです。自分の世界に入って集中できるのはメリットだと思います。聞こえる人の場合は、例えばコーチからアドバイスをもらう時は音声ですよね。でもスタジアムの観客が盛り上がっていて周囲がうるさい環境では、試合の時にコーチの声が聞こえないという場合もあると思います。それに比べてろう者の場合は音に左右されることなく、かなり離れたところでもコーチが手話で指示をすると、十分内容が理解できます。逆に便利かと思います。聞こえる人たちと試合をする時は、試合時間が前後する時にアナウンスで周知されるので、そういう時は、不便だと思うことが多々あります。時間が変更されたの知らないまま本番に向けて心の準備やアップをしてしまったということもあります。何やら様子がおかしいと後で気づくこともあります。他の選手に聞いて知るということもあります。自分の投擲（とうてき）時間に合わせて準備をしていくわけですから、時間の変更に気づかないというのはデメリットです。

○溝畑 ありがとうございます。今度は学生に聞いてみたいと思います。林原さんは、卓球体験で、聞こえない状況を作ってみましたけど、どのような違和感を覚えましたか。

○林原 聞こえないことで、「台に取り残されている感じ」がしました。周りに何も無い感覚があり、だから卓球に集中できたようにも思いました。周りが気にならなかったです。

○溝畑 それは林原さんとしては良かったのでしょうか。

○林原 卓球に集中することはできましたが、周りが見えない「暗い」イメージになっていました。

○溝畑 事前にお話しした中で、周りの人の声援が応援になるという話もありましたね。

写真⑥ 岡本 壮太 氏



○岡本 陸上は周りをお客さんに囲まれて試合をします。たまにヤジもありますが、声援が大きければ大きいほど、自分のパフォーマンスを大きくしていると思います。応援の力だと解釈しています。

ですので、音の聞こえない世界を考えると、自分の応援を失った感覚になり、私なら競技の際に不安になってしまうかもしれません。

○溝畑 岡本さんは音が聞こえないと不安ということでしたが、山田さん、石田さん、何かアドバイスありますか。

○石田 アドバイスではないですが、先程、座談会の始まる前に話をしていて、走っている時岡本選手は、今1位で走っていることを周囲の声で知るとおっしゃっていましたね。そういうことがあるのかと初めて知りました。

○岡本 本当に集中している時は周りが全く見えず、自分のレーンしか見えてないのですが、ただ、その割には周りのお客さんの声ははっきり聞こえて、場内のアナウンスも凄く鮮明に聞こえるというような状態があります。試合中の音が上手に聞き取れているかどうか、普段よりぼやけて聞こえていないかどうかなどで自分のコンディションを判断しています。

○石田 そこまで聞こえているのですか。僕は音という概念を知りませんが、もし聞こえていたら、「石田君1位」と聞こえると、もっと良い成績を残せたかもしれないですね(笑)。アドバイスではなかったですが、初めてそういうことを知りました。

○山田 補聴器をつけるとある程度は聞こえますが、それでも走っていたら応援は聞こえません。私は、聞こえる人でも集中すれば周囲の声は聞こえないと思っていました。しかし、今のお話を聞いて驚きました。私たちは聞こえない中で走っているのです、そもそも音がないことに不安ということはありませんので、アドバイスはなかなか難しいですね。逆に仮に、耳から情報が入ったとしても「走っている時に言われてもねえ」と思うかもしれません。

○岡本 陸上競技をしている人の中には、僕みたいに音が聞こえていると集中できているというタイプと、集中している時は周りの音を遮断するタイプの2つのタイプに分かれると思います。これは陸上選手独特の感覚だと思うのですが、陸上をやっている人でも音を大切にしている人もいれば、音を全く考えずに自分の世界で練習している人もいます。例えば、関学の多田選手は、試合中に音を大事にしています。多田選手は自分の足音で調子の良し悪しを判断しているとおっしゃっていました。足音が、良い音の時と悪い音の時があるそうです。結構、練習中にもそういう話をよくしてくださり、「足音をよく気にして練習しろ」とアドバイスしていただいたこともあり、それから僕も足音に関して意識するようになりました。

○溝畑 ありがとうございます。健常者にとっては音が大事ということがわかりましたが、逆にろうの選手には視覚や嗅覚などが凄く大事になってくるのかなと思います。ろうの選手はどこを大事にされていますか。特に敏感になっていることはありますか。

○安積 聞こえる人は耳に頼るのかも知れませんが、私達は視覚的なものが全てになるので、目を頼って集中しています。

○石田 聞こえないことで目からの情報に頼ります。ハンマーは4回、回って投げるのですが、リズムが非常に大切です。だんだん速くなっていく、というテンポが必要なのですが、その時に、聞こえる人は耳で足音を聞いて、岡本選手のように音に頼るかもしれませんが、私は体に伝わってくる振動を使っています。地面につく足の振動が、繰り返し練習しているとわかってきます。つまり、そういうことを意識することが大事なわけです。無意識で投げるわけではなくて、頭の先から足の裏まで神経を集中させることにより、音をカバーすることになります。例えば、ゴルフや野球のスイングでも、聞こえる人の場合は、素振りの音が聞こえますが、ろうの選手の場合は聞こえません。体の回転よりも腕の動きが先行し過ぎている、または、逆に遅すぎるなどを確認するために、指標となる物を置いて視覚的に判断しています。

写真⑥ 石田 考正 氏



○溝畑 ありがとうございます。事前に石田さんとお話をしていた中で、体調によってはバランス感覚が変わることがあるとおっしゃっていましたが、具体的にどのような体調の時にバランスが悪くなるのでしょうか。

○石田 私の場合にはハンマー投げは7kgのものを持ちますが、練習は2倍の15kgを使います。重いと感じるかどうか、腰をちゃんと使えているかどうか、体のどこに負荷がかかっているから今日は体調が悪いのか、ということを考えます。例えば、「昨日トレーニングしすぎたから今日は控えよう」というのは自分でわかります。軽い物と重い物を交互に持った時、軽い物を持った時に比べて重い物を持った時は、「ここの筋肉が使い切れていないから調子が悪い」などと自分の中で、ハンマー投げに限ってですが、体調を把握しています。

○溝畑 ありがとうございます。岸上さんはサポートに回っていますが、例えば水泳選手のどのようなところを気にしているのですか。

○岸上 私達は見ているだけでは、悪いところは実際にわからないことも多いので、そういう時には話をしたりして情報交換をします。話をするということが私達サポート側にしたら大事だと常々感じています。

○溝畑 皆様に質問ですが、大会中、長丁場になると終盤には疲労もあると思います。コーチやトレーナーなどとのコミュニケーションは、デフリンピック大会中はどうでしょうか。

○信田 基本的には自己管理ですが、足が痛いときはトレーナーに伝えてマッサージしてもらったりしますし、アイシングをしたりします。最終的には自分の調整力が問われると思います。

○山田 デフリンピックに同行するスタッフというのは凄く良いスタッフだとよく言われています。酸素カプセルが現地にあったり、電気マッサージ機や加圧式マッサージ機などをスタッフが現地まで持ってきてくださったりして、体調を回復させるのに凄く効果的でした。6日間毎日、陸上競技に出場していましたが、スタッフのお陰で疲労の回復が早かったです。非常に盛り上げ上手なスタッフで雰囲気作りにも貢献してくれましたし、特にスタッフは大事です。手話もできるスタッフでしたので、やはり日本チームが一つになっていたのはスタッフの力が大きかったと思います。

○石田 私の場合はトレーナーのマッサージは頼らない主義です。自分で自己管理の下に本番に臨む、というように思っています。しかし、サポートをしてくれている人が必要ではないというわけではなく、やはり心のマッサージというか、岸上さんがおっしゃったコミュニケーションは大切だと思います。肉体的だけではなく、コミュニケーションをとるのはろう者も聞こえる人も同じだと思います。

- 安積 これまでデフリンピックに参加してきて、私はいつも同じ整体師の方に同行してもらい、サポートしていただいています。女性の方で鍼の資格ももっておられ、個人の鍼灸院で使用されている道具も持ってきてくださいました。それが良かったのか疲れは感じなかったです。ですので、バレーチームも万全の体調で挑めたと思います。スタッフに感謝しています。
- 宮田 昨年のデフリンピックではサッカーの女子チームは経済的な理由で出場できませんでした。以前、韓国でアジア大会があったのですが、大会前に足を怪我してしまい、ギリギリまで練習ができない状況でした。そういう時にトレーナーとコミュニケーションをとり、リハビリに努めて、ぶっつけ本番で大会に参加できました。
- 溝畑 ありがとうございます。お話をしながら、本当に豪華なメンバーをお呼びしているなと思いました。実際にメダルをお持ちいただいています。どの大会のどのメダルが印象的ですか。印象深い大会を教えてください。信田さんは6回も出場されていますが、どの大会が印象深いですか。
- 信田 6回出場していますが、私は一度もメダルは獲っていません。悔しい経験があったから次に挑めたのだとも思います。チャレンジすることは大事ですね。今まで大きな怪我もなく嬉しかったです。
- 山田 サムスン大会が初めての出場でした。メダルが獲れると思っていなかったのですが、3つも獲得することができました。印象に残っているのはリレーです。聞こえる選手の場合はバトンを渡す時、声を出してバトンを繋ぐと思うのですが、デフリンピックの場合は、競技中に補聴器を外さなければならないというルールがあるので、バトンを繋ぐ時に声は使えません。練習をするしかないのです。大会の3か月前からはバトン渡しをひたすら繰り返し、練習を積み重ねていきました。リレーは自分だけで勝負するわけではありません。自分と相手のスピードを合わせて、自分の体調とバトンを渡す相手の体調とそれぞれが関係するので、声がなくても何とか良い形でバトンを繋いでいきます。それが「心のバトン」というのではないかなと思いました。
- 石田 メダルには様々な思い出が詰まっています。去年の7月から、全く練習がうまくいけなくなり、非常に苦しい期間がありました。デフリンピックで勝つために何をすればいいのか、大会まで残り2ヶ月という時、とりあえず僕は力で乗り切ろうと思い、ウェイトトレーニングを増やしました。それが結果的にメダル獲得に繋がったのだと思います。他にも、サムスン大会はルールが複雑だったこともありましたが、様々な思い出

がこのメダルに詰まっています。

○安積 今まで4回デフリンピックに参加しましたが、今回初めて金メダル獲れたことが印象深いですし、4回も参加させてもらいサポートしてくれた両親にも感謝しています。

○宮田 私は初めてデフリンピックに参加したのは高校1年の時のブルガリアの大会の時です。ブルガリア大会では、出場機会に恵まれなかったので、「次のデフリンピックで、この悔しさを晴らそう」と思っていました。ですので、昨年のサムスン大会は残念ながら女子サッカーチームが参加できなくて、とても悔しい思いをしました。3年後のデフリンピックには出場してメダルを獲得したいと思います。

写真⑥ 宮田 夏実 氏



○溝畑 ありがとうございます。宮田さん楽しみにしているので頑張ってください。学生の皆様から何か質問はありますか。

○中川 世界一になった時の気持ちというのはどのようなものでしたか。

○安積 あまりピンとこなかったのですが、海外旅行に行った際、世界地図を目にした時に、アメリカやヨーロッパなどに比べて日本は凄く小さな国なのに、その国がそして私が一員となって世界一になれたのだと、後から喜びが湧いてきました。

○山田 僕は初参加でメダルを獲得し非常に嬉しかったのですが、それと同時に聞こえる選手達の大会でも金メダルを獲りたいという意欲がわいてきました。日本は今、東京オリンピックで盛り上がっていますが、厳しい戦いだと承知していますが、東京オリンピックの出場も目指したいと思います。

○溝畑 それでは、フロアのほうから質問があれば受けたいと思います。何か質問はございませんでしょうか。

○質問者 デフリンピックでのメダル獲得おめでとうございます。サムスン大会に行かれて、私の中では、トルコ料理は油が多いというイメージがありますが、食事の環境が違う中で、試合までに食事面での体調管理はどのようにしていたのかを教えてください。また、聞こえる人と一緒にトレーニングすることで、ろうの選手の底上げにも繋がると聞いたことがあるのですが、実際に聞こえる選手と一緒にトレーニングをされていたのか、されていたのであればその様子をお聞きしたいです。

○山田 ご質問ありがとうございます。デフリンピックでは食事面でトラブルがありました。現地で体調を壊した人もいました。男子の陸上選手で言うと、半分以上の選手は、お腹を壊したと聞きました。僕の場合は母がイギリス人、父が日本人で、そもそも家庭での食事が、ヨーロッパの文化と日本の文化が入り混じっているのです、日常の食事も様々な「雑食」を食べるのに慣れていました。そういう意味では両親に感謝しています。私は体調を崩すことはなかったです。

○信田 トルコに着いて選手村のビュッフェは凄くおいしかったのですが、毎日同じ物を食べていたら飽きてきますよね。日本からカレーや味噌汁などを、持ち込んで選手達で調理をして食べたりもしました。

男子バレーの場合は、Vリーグの「NBKドリーマーズ」というチームの選手たちと一緒に練習を積み重ねてきたので、その甲斐もあって選手の力が上がり、チームのレベルアップに繋がったと思います。

写真⑥ 信田 光宣 氏



○安積 私も同じく日本食を持って行きました。試合が終わった後は選手村のビュッフェで現地のご飯を食べていましたが、試合の前は体調管理も大事なため、おにぎりなどを持って行って行っていました。ですので、日本の時と変わらない感じで試合に挑めました。聞こえる人と練習をするのは底上げにも繋がります。ただ、聞こえるチームと単に多く試合をしても負けることが多く、それよりはデフのチーム内でコミュニケーションを図り、デフのチームを確立していくというのも大事で、それが本番での金メダルに繋がったと思います。

○石田 食べ物の関係で言うと、日本にいる時にきっちりと規則正しい生活をするのが大事だと思われていますが、海外に行くと何が起こるかわからないですし、文化が違いますので、実は不規則な生活を日本でも続けることも大事なのではないかと思えます。例えば、決まった時間に食べなかったり、珍しい料理も食べてみたり、そういうことが海外の生活でも活かされると思えます。それも一種のトレーニングの一環だと思います。海外に行ったら、何でもかかってこいという感じで、日本で経験していることで自信をもつことができます。

○溝畑 様々な問題がありますよね。宮田さんが初めて海外に行ったのは中学生の頃ですよ。

○宮田 ブルガリアの大会では高校1年でしたので、食事も珍しい物にチャレンジする気持ちもなく、食べやすいものから食べていました。日本から持って行った物も食べていました。

○溝畑 他に質問のある方はいらっしゃいますか。

○質問者 私は、デフリンピックに関する取材を行っています。デフリンピックを伝えるというところで苦労しているのは、普段、記事がYAHOOなどのサイトに掲載されても読んでもらえなかったりしてなかなか知名度が上がらず、私の力不足で選手には申し訳ないと思っています。学生の皆様に伺いたいのですが、皆様、デフリンピックに興味はあるかと思うのですが、自分と同じ競技のデフリンピック選手の話聞いて、デフリンピックならではの面白さや、デフリンピックのどんなところをニュースで見たり聞いたりして、もっと知りたいと思いますか。魅力を感じる場所を教えてください。

○岡本 この講演会をするときに、予習の方が良いかと思い、僕はデフリンピックについて調べて、その時に陸上競技の動画を拝見しましたが、リレーでメダルをとった動画を見て、僕たちのような聞こえる選手のリレーとデフリンピックでのろうの選手達のリレーの違いが全くわかりませんでした。違いと言えば、スタートのところにライトがあり、初めてそういう物があることを知ったというくらいでした。お話にあったとおりにコミュニケーションでバトンを繋ぐということはあると思うのですが、技術的な面では、ぱっと見ただけでは違いはわからなかったことに僕は感動して、確かにデフリンピックとオリンピックと区別はしていますが、動画を見た時に、デフリンピックの選手も耳の聞こえる選手も同じ舞台上で競技をする環境が、将来的にはできてもおかしくないのではないかと思いました。

○岸上 本日はありがとうございました。私は先程お話しさせていただいたとおり、今はマネージャーをしていますが、中学、高校はずっと水泳をしていました。水泳はスタートが大事と言われていて、スタートの時の合図などの違いを知れて勉強にもなりました。逆に観客の応援が力になるという話や、デフリンピックの選手も同じように緊張するという話などを聞いて、私たちと同じ部分も知れて良かったと思いました。

○溝畑 まだまだ質問はつきないですが、時間となりましたので座談会を終わります。

9名のアスリートの皆様には大きな拍手をお願いいたします。

写真 ⑤⑤ 座談会の様子



写真 ⑤⑥ 座談会後の交流の様子

写真 ⑤⑦ 座談会後の交流の様子



閉会の辞

松岡 克尚

○松岡 皆様、お疲れ様でした。デフリンピックの選手達のことをよく理解できたのではないかと思います。

今回の企画は、朝から長丁場で盛りだくさんでしたが、皆様楽しんでいただけましたでしょうか。私も朝からデフリンピックについての講演、バレーボールの親善試合の観戦、デフ卓球、座談会と拝見しましたが、私はスポーツをする体力がないことがよく理解できました。一方で、先程のお話でも思ったのですが、スポーツのいきいきとした躍動感や、楽しみ、正々堂々としたスポーツマンシップが、音のあるなしに関係なく、コミュニケーションの違いも関係なく、ルールの違いを超えた、全てのスポーツをする人、見る人すべてに共通して得られる感覚だと思いました。聞こえない中、体を使って自己表現をされている皆様に、本当に心から敬意を表したいと思います。そういうスポーツの自己表現も大事だと思わされました。

さて、スポーツはプレーだけではなく、「見る」という行為を伴います。それは「スポーツすることが見られる」ということでもあります。誰から見られるかといえば直接的にはゲーム、プレーを観戦する人が見ているわけですが、そういう人たちの背後には社会というものがあります。言い換えますと、観客を通して社会に見られているということです。デフスポーツが社会からどう見られているかは、ろう者が社会にどう見られているかにも繋がっていると思います。デフリンピックがあまり知られていないという話がありましたが、「知られていない」という見られ方をしているのです。先程の質問とも関連しますが、こちらが発信しても社会は見てくれていないという現実が残念ながらあると思いました。「デフスポーツは素晴らしい」というだけで終わらせず、スポーツと社会の関係、デフスポーツは社会とどう関わっていくべきかを考えていかなければならないと思いました。テレビ番組に例えると、残念ながら現状では、視聴率が低いわけですね。視聴率を高めるのも大事ですが、視聴率が高くなったとして、ただ「頑張っているね」「凄いね」と誉めてもらうだけで良いのでしょうか。あるいはオリンピックと一緒にしたらどうかというお話もありましたが、少なくとも今は分断してもいいという見られ方になっていますので、果たしてそれで良いのか、これからはそのようなことも問われるのではないかと思います。

皆様、本当に毎日トレーニングに励まれて、とても素晴らしいと思います。一歩進んだ社会との関係、デフスポーツと社会の関係、ろう者と健聴者、障害者と健常者の関係に繋がっていくことを考えるきっかけになればこれ以上の喜びはございません。

ということで、最後にお礼申し上げて、閉会の挨拶とさせていただきます。司会をしてくださった溝畑先生をはじめ、ご登壇者の皆様、ありがとうございます。それから手話通訳、要約筆記をしていただきました皆様、ありがとうございました。

登壇者紹介

みぞはた じゅん
溝畑 潤 (関西学院大学人間福祉学部教授／デフラグビースポットコーチ)

まつおか かつひさ
松岡 克尚 (関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員)

ふる たかよし
古 隆善 (兵庫県聴覚障害者協会理事／

デフリンピック・サムスン大会日本選手広報担当)

たいら えいじ
平 英司 (関西学院大学人間福祉学部非常勤講師／手話言語研究センター専門技術員)

<デフリンピックアスリート>

あづみ りえ
安積 梨絵 (バレーボール女子)

いしだ たかまさ
石田 考正 (ハンマー投げ)

のぶた みつのぶ
信田 光宣 (バレーボール男子)

みやた なつみ
宮田 夏実 (サッカー女子)

やまだ まき
山田 真樹 (短距離走)

<関西学院大学体育会選手>

おかもと そうた
岡本 壮太 (陸上競技部)

きしがみ そら
岸上 空良 (水泳競技部マネージャー)

なかがわ れい
中川 礼生 (バレーボール部男子)

はやしぼら しょうた
林原 正汰 (卓球部)

手話言語研究センター文化イベント報告書

2019年2月15日発行

編集 関西学院大学手話言語研究センター

発行 関西学院大学手話言語研究センター

〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155

電話 0798-54-7013

FAX 0798-54-7014
